

第58回 中高校生の吃音のつどい(お料理教室)

3月17日(日)、小学生17人、中学生9人、高校生10人、ご両親29人、スタッフ47人の計112名が参加。池袋小学校ことばの教室及び家庭科室にて開催。午前はビーフシチュー、フォカッチャ、トマトカップ(湯剥きトマトのポテト詰め)を皆で作る。午後のどもることについてのグループごとの話し合いで、みたらし団子を差し入れ。

今回、自分にとって5回目の参加であり、2回目のリーダーも務めました。例年多くの参加者が集う料理教室で、今年は100人を超える参加者が集まり、前日までキャンセル待ちが出るほどでしたが、なんとかキャンセル待ちの方も皆参加いただくことができ良かったです。午前の料理教室では小学生と高校生が2人ずつ、スタッフ合わせて7人で一緒に料理を作りました。異なる世代が一緒になって何か作業するというのはなかなかないことで、集いでしかできない経験がたくさんあると思います。最初は緊張していたのか大人しかった子もいましたが、一緒に料理を作るうちに打ち解けてきたようで段々と口数も増え、皆で楽しく作ることができました。

午後の小学生Gの話し合いでは、3月ということで環境が変わったり、悩みごとが増えたりする時期だと思います。4月から学校生活が始まる中、今悩んでいることを話し合いました。皆それぞれ悩みを抱えていたようですが、話し合うことでいろいろな意見・解決法を共有してくれたと思います。改めて同じ吃音の悩みを分かち合う場の大切さを感じました。学校の中では悩みを共有できる人が見つからないというのも吃音問題の特徴の一つで、だからこそ集いでしかできない体験や話せないこともたくさんあると思います。私は社会人になりましたがなんとか土日休みなもので、今後も集いのスタッフとしてお世話になりたいと思いますし、もっとたくさんの人とお話したいです。よろしくお願いします。以下、文中の学年は昨年度のもの。(リーダー;松本直大、猪俣俊明、菊地由莉、伊藤悠大)

M.Fさん(小5女子)

スタッフの皆さん、この前はありがとうございました。私はこのような会は初めてだったけれど、自分と同じようにどもっている人がたくさんいて驚きました。話を聞いてもらったり、他の人の話を聞いたり、とても勉強にもなりました。私と同じ5年生の友達もできたし、料理もうまくできたので、とても楽しかったです。これからもここで学んだことを生かしていきたいと思います。また参加したいです。よろしくお願いします。

A.Fさん

その節はたいへんお世話になりました。同じ吃音の方といろいろなお話ができ、とても有意義な時間でした。娘も最初は緊張していたようでしたが、とても楽しかったようで、あれ以来表情がとても明るいです。自分の気持ちや吃音を理解してくれる人ができたのは、娘にとってとても心強いことだと思います。スタッフの皆様には本当によくしていただ

きました。ありがとうございました。

Y.I君(小6男子)

お料理のフォカッチャとみたらし団子が美味しかったです。リーダーの人といろいろ話せてためになりました。



N.Iさん

有意義な時間を過ごさせて頂きました。息子にも、みなさんがたくさん話しかけて下さって、有り難かったです。また、息子と一緒に参加出来るということです。同じ年の男の子とも、お話出来たようで、しかも、中学受験されている方も3人もいて、いろいろな話ができて、良かったです。

K.A君(小6男子)

初めての参加で不安だらけでしたが、何を発言しても温かく接してくれ、心の中でつかえていたものが取り除けた気がします。これから僕は中学生になります。集いで学んだことを胸に、新たな一歩

を邁進していけたらと思います。ありがとうございました m(_)m

M. A 君 (高2 男子)

集いに参加したのは今回で三回目ですが、料理教室に今回初めて参加しました。皆さんと協力して料理を作ったり会話したりするのはとても楽しく、まるで学校の調理実習のようでした。フォカッチャを大きくし過ぎて大変でしたが、やっぱり自分達で作った料理は美味しかったです。

また、午後のグループに分れての話し合いでは、皆さんと様々な話をしたり、川口さんからスタッフの活動について色々聞いたりしました。ここでは自分の吃音を気にすることなく自由に話せるので、心の重りが外れたような気分でもとても気持ちよく会話することができました。色々濃いグループでしたが、楽しく話し合いができてとても良かったです。

解散後の打ち上げでは、皆さんと会話したりしてとても楽しい時間が過ごせました。特に同じ高校生の人達ととても親しくなり、とても充実した楽しい一日でした。今日の活動で得た経験を生かして自分なりに吃音と向き合っていけたらいいなと思います。

K. H さん (高3)

私が初めて集いに参加し、「どもるのは私だけじゃない」と感じてからもう6年近く経ったなんて信じられません。高校は忙しく、中々予定が合いませんでしたが、3月のお料理教室だけは毎年参加することができました。そして今回が参加者として最後の集いとなりました。

今回の話し合いでは「自己肯定感」をメインに、吃音の自分を認め好きになること、を教えてくださいました。中学生の時は、「どもらない方法」を話し合うことが多かったように思います。しかし、少し大人になった高校生では、「どもりとの向き合い方」を考えるようになり、吃音である自分を肯定することの重要性を感じました。自分の成長を(僅かかもしれませんが)実感した集いになり、とても有意義な時間を過ごせたと思います。

お忙しい中、沢山の準備をしてくださったスタッフの皆様、ありがとうございました。集いの度に、吃

音と真っ直ぐ向き合える環境をつくってくださった事、心から感謝しています。これからは微力ながらお役に立てたらと思うので、スタッフとしてどうぞよろしく願いいたします。

(文芸部で吃音についての詩を創作したことがあるのですが、吃音者の方々、またそのご家族の皆様にご覧に読んでいただいたことありません。もしなにか感じたこと、考えたこと等ありましたら、感想をいただきたいです)



「もうすぐ春」

私は言葉をたべてしまった
「すき」も
「うれしい」も
「ありがとう」も
全部まとめてたべてしまった

くすぐられたような喜びを感じた時 それを誰かに伝えたい
共感してほしくて 声にだそうとするけれど
のどはそれを許してくれない
むりやり石をつめられたように ぐっと 動かない

しめつけられたような悲しみを感じた時 それを誰かに伝えたい
なぐさめてほしくて 声にだそうとするけれど

舌はそれを許してくれない 息をするのも許してくれない
何かに怯えたように じっと 動かない

声がでない自分なんて「きらい」
伝えられなくて「かなしい」
しっかり言えなくて「ごめん」
言葉なんてなかったらよかったのに。

そう思った瞬間 雪が降り積もった朝の様
私の世界からは音がひとつもなくなってしまった

簡単には声にならないから
誰かが思いを伝えてくれた時には

すると結び目がゆるんだように ほわっとところが
軽くなる
たとえゆっくりでも 思いを伝えられた時には
誰より一番 私がうれしいかもしれない

いつでも「ありがとう」って言えるわけじゃないから
なめらかに「ありがとう」が言える人より
言葉の重みを知っている。
声に出すことは辛いけど
会話ができないなんて寂しい 伝わらないのはや
っぱり切ない

言葉と思いを音にのせ
自分の声で誰かに届ける
それはきつと
とても難しくて
とても素敵なことだと思うの

N.O さん（スタッフNさんのお母さん）

詩を読むことはもとと得意ではない。そんな私
でも徐々に「おっ」と感ずるほど最終連の印象が良
かった。第5連までは暗い迷路の中。第6連で薄日
が差し込んで、最期の連は希望をにおわせる。そ
う感じた後で改めて題名をみてなるほど、と納得し
た。

作者の辿ってきた長い、苦い道の先にほのかな
陽だまりが見えるような気がする。読んでいる私も
ほっこり暖かくなった。

詩の感想とは話がそれるけれど、「つどい」に参

加して何らかの感触を得たみんなはその後どうす
るのだろう。もちろん、少し心が強くなって、あるい
は、仲間ができて、それから？？

吃音者の苦難はうまくしゃべれないことに加えて、
周囲の理解が少ないことにもあるかと思う。（たまた
まよき理解者ばかりに恵まれた幸運な人もあろうが
…）

残念ながら、うまくしゃべれるような方法はいまの
ところはないらしい。でも、周囲の人の意識を変え
ることなら、できるかもしれない。

だから、つどいを卒業したら、今度は一人でも多
くの人に「吃音者」の苦しみを伝えて間違った理解
や誤った対応をしないよう働きかけてほしいと思う。
音楽が得意な人はその手段を使って、書くのが好
きな人はその道で、教壇に立ったなら一人でも多く
の生徒に、「吃音」について伝えてほしい。

そして多くの人が吃音を変えたとか、おかしいとか、
思わなくなったら少しはましな世の中になるのでは
ないか…

その意味でも、Kさんの詩もできるだけ多くの人
に読んでほしい。

K. Kさん(スタッフ・高校生G担当)

私は、吃音の臨床家を志す学生、吃音のある者
の二つの立場でつどいに参加させて頂きました。

学生としては、小学生をはじめとする年少者の
振る舞いから、吃音の本質に迫るような発見をする
事ができました。私が関わらせて頂いた子達は、ど
もりながらも、伝える事に一生懸命でした。私は、
言う事に一生懸命になり過ぎて、伝える力に欠ける
事があります。それは、どもる事を恐れ、様々な振
る舞いをする事で、自らどもることを複雑にしてい
る事に原因があると思います。子供達を見ていると、
吃音は「ただどもること」であって、それ以外の何物
でない事がよく分かりました。吃症状が生活のあら
ゆる場面に派生してしまう事がありますが、「どもる
こと」以外は吃音ではなく、上手くいかない事を吃
音のせいにしてしまうのは、自分への言い訳に過
ぎないと言うことを認識させて頂きました。

また、私は高校生の話し合いに参加させて頂き
ましたが、流石「つどいに参加する勇気のある者」



という印象を受けました。それは、自分の将来を自らの意思で模索している事が伝わってきたからです。「つどいに参加する勇気もなかっただろう者」であった高校生時代の私が、吃音を恐れ消去法で進路を選択したのと比べ、雲泥の差があったと思います。ぜひ、自らの道を突き進んで欲しいです。

最後に、今は理解のある恵まれた環境にある私ですが、常に馬鹿にされるのではないかと言う強い恐れを持ちながら人に接しています。今回つどいの皆さんとお話しさせて頂く中で、もう恐れなくて良いのかなと、少し前向きになることができました。きっと、私の他にもそういう人がいたはずです。つどいにはそのような力があったと思います。

K. Mさん（スタッフ・小学生G担当）

私はまだ学校で吃音の授業は学んでおらず、参加させていただくにあたり参考書を僅かに読んだだけの知識しかなかっただけですが、吃音という悩みを抱えている皆様と実際に接しさせていただいたことで、どのような症状なのか、またどのような悩みで困っているのか、年齢によって様々でしたが私にとってとても勉強になりました。参考書での学習ではなかなかイメージが付きにくかったのですが、実際にビーフシチュー等を一緒に作ったり、ジャンケンゲームを行ったり、グループや個別での話し合いを見学させて頂いたことによって、コミュニケーションもとれ、吃音という症状がどういうものか、理解が深まりました。中には私が接していた時は全く症状が出ない子もいましたので程度も様々であると感じました。どもりの症状が出て他の皆は温かく本人の言葉が出るまでゆっくり待っていたり、小学校低学年の子から大人の方まで皆が笑顔でお話されていたのがとても印象的でした。しかし、やはり皆さんの話を聞くと学校ではからかわれたり、学校の担任の先生にはなかなか理解されず、苦しんでいる様子の方もたくさんいるようでした。吃音などの言葉の不得手は一見、麻痺など目で見て見えるものではないので、知識が無い人にとっては気づきにくい・理解しにくいのではないであろうかと感じました。STが学校の担任としっかり連携することもよくあると、沖村先生からお話を聞きましたが、

苦しんでいる子が大量にいるならば、今後それも積極的にやっていくべきことであると感じました。

正直、会に参加させていただく前までこんなに皆様が明るいとは思いませんでした。きっと私自身が吃音の症状が出たら皆様のように明るく出来るかと言われると難しいかもしれません。ですが、このような会があることによって「皆同じ症状を抱えているんだ」「自分一人じゃないんだ」と、勇気をもらえる場所であると感じました。

2年制ということで机上学習と実習が主な学習となってしまうのですが、このような機会を大切に、皆様にとっても「良いST」になれるよう頑張っていきたいと思います。



体験談 松本 直大^{なほひろ}（スタッフ）

最初に吃音で深く悩んだのは、小学生の時にクラス全員で演劇をした時のことだと思います。クラスでも仲の良い友達が仕切っていた演劇の企画で、僕はセリフ量の多い役を割り当てられてしまい、それから当日までどうやってこの局面を乗り切ろうか悩む日々が続きました。そのまま当日になり、僕はみんなの前でどもってしまっ大変な恥をかいたという話ならまだ良かったと思うのですが、その時の僕はどもることからどうしても逃げたいと思い、直前に先生に役の交代をお願いしました。どもることから自分の意思で逃げたのはこの時が最初だったので、今でもこの時のことは印象に残っています。当然それまで仲の良かった友達とは疎遠になり、その理由が「吃音から逃げた自分」ではなく「吃音」そのものにあると思ってしまった僕は、以後その勘違いに気付くことなく中学、高校時代を過ごしました。（後略）

後記

◆将来就く仕事について

お母さん方（お父さんも）は、我が子の将来の可能性を狭めてしまうような…声掛けはどうぞしないで。「うちの子はどもるので、学校の先生や幼稚園の保育さんなどやると、どんなモンスターペアレントから苦情が来るか、分かったものじゃない…」と。やってみる前からの余計な心配ははずれなことが多い。吃音なので、どもる時はどもりながら。どもらない時はどもりを出さないで…、彼ら

(彼女ら)は大好きな子供達と接すれば良い。現実、吃音の先生は周りに数多いです。「何言ってるか分からない!？」と、仮に突っ込まれたとしても、つどいの話し合いの中で、職場で生きていくヒントは数多得られる。

●来る春を共に祝う。お料理教室で、皆様と今年も新たに顔合わせでき、こうして今年が始まる…。年4度のつどいの中でも格別のつどいです。始まって以来の110名を超える仲間(吃音問題を真摯に考える仲間)と集えたこと。香央莉さん(スタッフ)とうれしいね…と。

♥ランチルームに、全員集合しての開会式。ぐるり、360度皆様に、取り囲んでもらっての舞台。その輪の中に立てる…、今ここにいる幸せ。

♣「志乃ちゃんは自分の名前が言えない」♣

太田出版(660円)という、ご自身吃音の漫画家 押見修造さんの漫画、読みました。朝日新聞(2013年1月13日)でも紹介。新クラスの自己紹介で、全く第一声の出てこない主人公 志乃ちゃん。ああ、これ、スタッフの〇〇さんの高校時代のことだよね…と思っちゃうくらい、親近感覚える志乃ちゃんが出てきます。そんな彼女に親友ができる。高校生の域をはるかに超えたギターの腕前の女の子の。「私超音痴だから…弾くの私やるから、あなた(志乃ちゃん)歌ってよ!秋の高校文化祭に一緒に出よう!」「え?そんな急なこと?無茶だよ」「ぐだぐだ言っていると、二人ともババアになっちゃうよ!」強引に引っ張られ(え?〇〇さんそっくりですって?)、駅前での路上ライブ決行。歌はどもらないと言うけれど、想定超えて、志乃ちゃん、不思議に歌に心がこもって良いのです。さあ、どう展開していくでしょう?ぜひお読みください。

文化祭で歌う歌。「魔法をください。私に魔法を。皆と同じようにしゃべれる魔法を。魔法が欲しい。それさえあれば私は外に出かけていく。(でもいろいろ悩んで考えたけれど)魔法なんかいない…」と歌い叫びながら、大きくなっていく。第2巻の展開楽しみなのは、私だけではないと思います。(押見さんに感想まとめて送りたいので、書けた方はメールで最寄スタッフ宛にお送り願います)

(つどい代表 佐藤隆治)

